

取調べの 可視化で 刑事司法を 変えよう！

市民集会



香港海傍警察の取調室 机は三角形で取調官、被疑者、弁護人用に作っており、被疑者の入室直後から部屋全体が写るようにして3本のビデオテープに同時に録画が開始され、そのうち1本は弁護人に交付されます。

開催日時 2008年(平成20年) 当日先着180名 入場無料！

10月18日(土) 午後1時30分～午後4時45分

- 13:30 開会
- 13:35 ドキュメンタリー映画「つくられる自白」(短縮版)上映
- 13:50 基調報告「取調べの可視化の現状と課題」
- 14:05 講演「志布志事件から可視化を考える」講師：毛利甚八氏
- 15:00 休憩
- 15:10 パネルディスカッション
- 16:45 閉会



開催場所 兵庫県弁護士会館 4階講堂

神戸市中央区橋通1丁目4番3号
(JR神戸駅から徒歩7分・地下鉄大倉山駅から徒歩5分)

※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。

兵庫県弁護士会 ☎078(341)7061

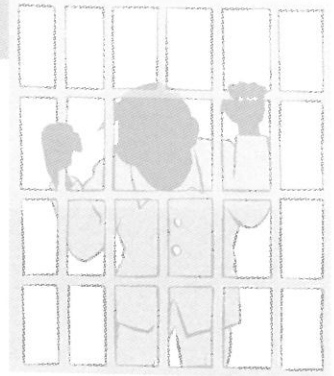
後援 日本弁護士連合会

集会の内容

わが国では、警察や検察で行われている取り調べは密室で行われているため、捜査官の脅迫・暴行などによって、被疑者はウソの自白をしたりして、えん罪が発生しています。そこで、密室での取調べを最初から最後までDVDに録画しておけば、その内容を後で検証できます。取調べ状況を全て録画することを「捜査の可視化」と言います。

このような「捜査の可視化」は英米、韓国、台湾等で実施されており、世界の潮流になっています。また来年から始まる裁判員裁判では、市民が参加することになりますので、分かりやすい裁判を行うためにも「捜査の可視化」は必要です。

今回の集会では、実際にえん罪として認められた志布志事件の元被告人の方をお招きして、密室でも取調べの問題を一緒に考えましょう。



● ドキュメンタリー映画

「つくられる自白—志布志の悲劇—」(短縮版) 上映

● 基調報告

「取調べの可視化の現状と課題」

森津 純 兵庫県弁護士会取調べの可視化実現本部副本部長

● 講演

「志布志事件から可視化を考える」

講師 毛利 甚八 (ライター、漫画「家裁の人」等原作者、写真家)

● パネルディスカッション

「捜査の可視化で刑事司法は変わるか

— 志布志事件を題材にして —」

コーディネーター 赤松 範夫 (兵庫県弁護士会取調べの可視化実現本部本部長代行)

パネリスト 毛利 甚八氏

栗野 仁雄氏 (フリージャーナリスト)

川畑 幸夫氏 (志布志事件被害者)

志布志事件弁護士

profile

毛利 甚八 もうり じんぱち

1986年より漫画「家裁の人」の原作を手掛ける。『季刊刑事弁護』(現代人文社)に「事件の風土記」(文と写真)で4回にわたり福岡事件を連載。メールマガジン「月刊少年問題」の編集長や、中津少年学院で篤志面接委員として活動。日弁連製作のドキュメンタリー映画「つくられる自白—志布志の悲劇—」の脚本も手掛ける。単行本に漫画原作作品の「家裁の人」(小学館)などのほか、ルポルタージュ「宮本常一を歩く」(小学館)、インタビュー集「裁判官のかたち」(現代人文社)などがある。

栗野 仁雄 あわの まさお

ジャーナリスト。昭和31(1956)年兵庫県生まれ。大阪大学文学部西洋史学科卒業。ミノルタカメラ(現コニカミノルタ)を経て昭和57(1982)年から平成13(2001)年まで共同通信社記者。翌年からフリーランスとなる。現場と当事者取材第一をモットーに社会問題を中心に幅広いテーマで週刊誌、月刊誌などに執筆。著書に、『サハリンに残されて—領土交渉の谷間に棄てられた残留日本人』(三一書房)、『瓦礫の中の群像 阪神大震災 故郷を駆けた記者と被災者の声』(東京経済)、『ナホトカ号重油事故—福井県三国の人々とボランティア』(共著・社会評論者)、『あの日、東海村でなにが起こったか』(七つ森書館)、『そして遺されたもの—哀悼 尼崎脱線事故』(部分・文藝春秋)、『戦艦大和 最後の乗組員の遺言』(取材構成・ワック)、『アスベスト禍—国家的不作為のツケ』(集英社新書)、などがある。